

氏 名 : 久保宣子  
学位の種類 : 博士(健康科学)  
学位記番号 : 研博第62号  
学位記授与年月日 : 令和5年3月9日  
学位授与の要件 : 学位規則第4条1号該当  
論文題目 : 国際看護学教育における Giger の異文化アセスメントの視点を用いた教育プログラムの開発と成果の検証－cultural competence の獲得を評価指標に－  
論文審査委員 : 主査 木村 恵美子  
副査 角 濱 春 美  
副査 鹿 内 彩 子

## 論文内容の要旨

### I. はじめに

現在の日本は、在留外国人数は増加傾向である。さらに、新型コロナウイルスの影響により2020年以降はインバウンドが激減しているものの一時的であり、再びインバウンドの増加が予測される。このことから、日本にいながらも外国人に看護を提供する機会が増えており、文化の異なる対象に看護を提供できる能力を獲得できる教育の必要性が高まっている。

本研究の目的は、看護大学の学生を対象に、Gigerの異文化モデルを用いた、異文化の対象との直接的な接触を含む教育プログラムを開発し、この評価を行うことである。プログラム評価を通し、異文化の対象者理解を促進できる国際看護教育について考察する。

### II. 研究方法と対象

#### 1. 研究デザイン

異文化対象理解プログラム(以下、新しい方法群とする)のプロセス評価、実施前後のアウトカム評価によるプログラム評価研究である。アウトカム評価については従来の教育(以下、従来の方法群とする)プログラムとの比較を行った。

2. 対象: 国際看護活動論を受講予定のA大学の看護基礎教育の最終学年の学生とした。

3. データ収集期間: 2021年10月～2022年10月

#### 4. 教育プログラム

国際看護活動論全12時間のうち、異文化対象理解を目的とした演習3時間について、教育プログラムを変えて教育を行った。

1) 従来の方法群: 2021年度にA大学の国際看護活動論「文化を考慮した看護」で、自文化を認識するウォーミングアップシートを記入後、実際に起こった場面から構成されたDVD教材を視聴した。気付いたことや問題点、適切な対応など自分の考えをワークシートに記

入した。クラス内で意見交換の後に、解説を視聴した。その後、解説後のワークシートを記入後、再度、クラス内で意見交換を行った。

2) 新しい方法群：2022年度にA大学の国際看護活動論「文化を考慮した看護」で、Gigerの文化的個別性を理解する6つの視点を取り入れ、事例の活用、外国人の模擬患者と直接的な対話、双方向のやり取りやグループワークをとり入れた内容で行った。異文化対象理解プログラムの開発は以下の段階で進めた。

段階1：プログラム原案の作成

段階2：国際看護学のエキスパートへの意見聴取によるプログラム案の精選

段階3：同様の対象者に対するプレテスト

## 5. データ収集

1) 対象特性として、異文化への接触機会と頻度について収集した。

## 2) プロセス評価

(1) 異文化に関わる知識の獲得：Gigerの視点について知識問題と事例記述問題によるミニテストを実施した。

(2) 異文化および異文化看護に関する認識の変化、態度の獲得：振り返りシートに自由記述させた。

3) アウトカム評価：cultural competenceの測定のために国際理解測定尺度と異文化間看護能力尺度を用いた。

4) データ収集の手順：対象施設と対象者へ説明し、同意書を取得した。科目受講前に、デモグラフィックデータ・国際理解測定尺度・異文化間看護能力尺度、異文化対象理解プログラム実施後に、ミニテスト・振り返りシート、科目受講後に国際理解測定尺度・異文化間看護能力尺度の記入を依頼した。

## 6. 分析方法

1) プロセス評価：ミニテストは採点をして単純集計し、振り返りシートは内容分析を行った。

2) アウトカム評価：群内比較では、正規性を確認した後、受講前後で対応のあるt検定を行った。群間比較では、受講前後の差を算出し、両群間で検定を行った。講義前及び講義後の新しい方法群と従来の方法群の群間比較を行った。いずれも正規性を確認した後、等分散性を確認し2標本t検定を行った。解析には、統計ソフトIBM SPSS Statistics24を使用し、有意水準は5%とした。

7. 倫理的配慮：青森県立保健大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号21095）。

## Ⅲ. 結 果

1) プロセス評価：作成した異文化対象理解プログラムに沿って計画通りに授業の進行ができた。ミニテストの語句の選択問題は6割程度の得点率であった。事例記述問題では、Gigerの視点に沿った回答が得られた。異文化及び異文化看護に関する認識の変化、態度の獲得について、学びの振り返りシートを内容分析した結果、【異文化アセスメントの意義】【Gigerの視点の学び】【文化的背景理解の重要性への気づき】【看護実践時の配慮】【ヘルスケア提供者としての公正な態度のありよう】【異文化への興味関心の醸成】の6つのカテゴリと21のサブカテゴリが抽出された。

2) アウトカム評価： 従来の方法群の受講前後の cultural competence 獲得状況では、全ての下位尺度で講義後の平均値が上昇した。国際理解測定尺度の「世界連帯意識の育成」、異文化間看護能力尺度の「異文化間看護の文化特定の知識」「異文化間看護の文化一般の知識」に有意な上昇が認められた。新しい方法群では、異文化間看護能力尺度の「異文化間看護の文化特定の知識」「異文化間看護の文化一般の知識」「自文化の認識」に有意な上昇が認められた。従来の方法群と新しい方法群の講義前後の習得度の差は、国際理解測定尺度の「外国語の理解」で有意な変化の差が認められた。講義前及び後で異文化間看護能力尺度の「異文化間看護の技能」が新しい方法群が従来の方法群に比べて高かった。

#### IV. 考 察

異文化対象理解プログラムのプロセス評価から、外国人との直接的な対話を含んだ本プログラムは、価値観や習慣をはじめとする多様性の存在に気づき、文化背景を理解する知識やヘルスケア提供時の工夫、公正な態度が大切であることを学び、異文化への興味関心が引き出されていた。アウトカム評価の cultural competence では「自文化の認識」の獲得に有意な変化があり、異文化を知って理解したからこそ、日頃意識しない自文化を認識することになったと考えられた。従来の方法群と比較し既存の質問紙でのコンピテンス評価による優位性は認められなかった。本プログラムが持つ異文化への直接的接触という特徴を生かすために、教育内容と方法を洗練する必要がある。看護基礎教育で習得すべき cultural competence を明確化し、評価指標としていく必要があると考えられる。国際看護教育で異文化の対象理解を促進できるように、プログラムを改良し実施効果を評価しながら、中長期的な視点でプログラムの有益性を繰り返し検証していく必要がある。

## 論文審査結果の要旨

異文化の対象に看護を提供するにあたり必要とされる「異文化アセスメント」の教育プログラムを開発し成果を検証したプログラム評価研究である。国際的に用いられている Giger の理論を用い、異文化の対象への直面を含む独自の教育プログラムを開発した。看護基礎教育の学生を対象に実践した結果、知識と望ましい態度の習得に加え、異文化への興味関心が引き出された。アウトカム指標として用いた cultural competence は従来の教育と比し、優位性は明白ではなかった。プロセスとアウトカムを総合的に考察し、学生の知的好奇心を引き出し、異文化看護の実践を現実的に考えることができる効果のあるプログラムであると考察した。

概念分析をはじめとする丁寧な文献検討をもとに、適切な段階を経て教育プログラムを開発した。評価については、データ収集、結果、考察、今後の展望に至るまで適切な方法を用い論理的に説明されていた。これらのことから、研究者としての態度、能力が十分であると判断でき、博士（健康科学）に値すると認める。